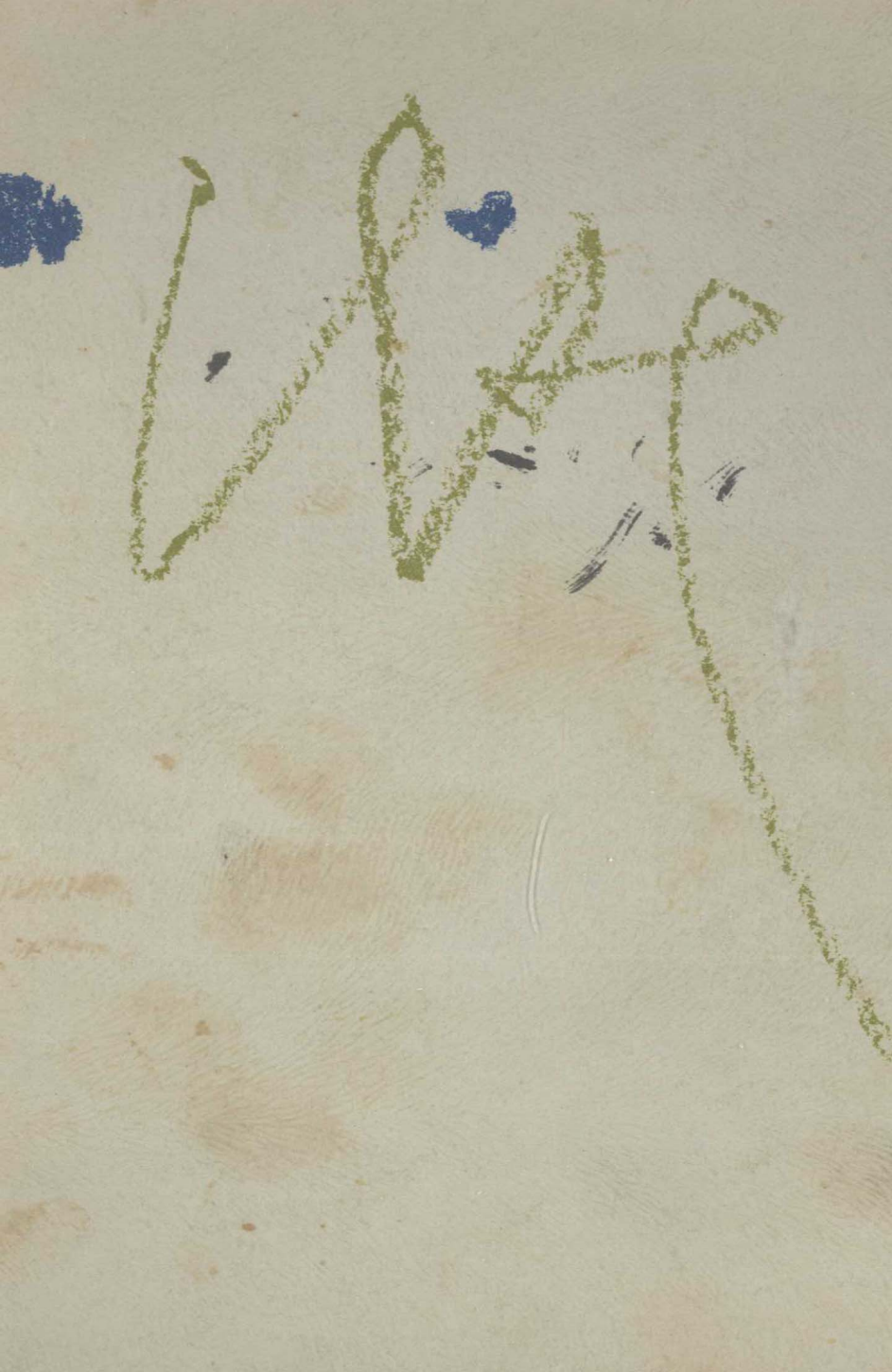




藤原審爾
わたしの事情

講談社版

わたしの事情

一九六五年一月一日発行

著者 藤原審爾

発行者 野間省一

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 有限会社大光堂

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三の一九

電話 東京九四二局一一一大代表

定価 四三〇円

©1965 Shinji Fujiwara

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

第一話 眞実 一五

第二話 芸 三

第三話 晩情 一四

第四話 爆発 一九

第五話 事情 二六

装
幀
获

太

郎

わたしの事情

第一話
真
実

障子一枚むこうの台所からの物音で、蚊帳の中の織枝は目をさました。弟の修の妻の若くて可愛い英子が、織枝をおこさないように気をくばって、そっと朝食の支度をしているのだが、障子一枚むこうというせまきでは、どうしようもない。

食器ってなぜ音のしない物でつくらないのかしら？

自分の目がさめたせいではなく、まだおさない少女のようなどころがのこっている可愛い英子の、心づかいが実らないのを、織枝はあわくもどかしく思った。

修が二階の寢床の中で、

「おい、起きろよ」

と眠っている英子を、腕でつついて起した様子が、つづいてうかんできた。ねむそうに起きだした英子のすがたが、脇裏にうかんできたところで織枝は目をあけた。左腕の時計をみようと、曜子のお河童の頭の下から腕をぬきかけ、曜子の小さい手がしっかり織枝の浴衣の寝間着の襟をにぎりしめているのが、織枝の目に映った。

六月で五つになった曜子は、今日から織枝が泊りこみの家政の仕事に出かけていくのを知っ

ている。離婚してから三年、派出家政婦になってから二年たつので、曜子は母親がいけないことに馴れている。わりにもわかりがよい子なので、泣いてだだをこねて織枝を出ていかせないようにしたりしない。むしろ、反対に、英子に抱かれて駄まで見送りにやってきて、元気な声で、「いつてらっしゃい」と小さい手をふるふうである。

そういう曜子をみていると、かえって織枝は、曜子のことばかり考えて働いている自分が、ただ必死で空まわりしているように情けなく思えたり、結局、子どもなんて動物とおなじで、環境に馴れて平気で育つのにちがいない。そして年頃になれば、おなじように平気で巣立っていくんだわと、うらさみしくむなしくなったりする。しかし、やはり、ほんとうは自分をはなしたくないのだわ。

襟をにぎりしめた小さい手で、そんな確証を得て織枝はじいんとからだが熱くなった。はつきり目がさめた。

曜子が襟をしっかりとにぎりしめているのは、むろんほかの理由かもしれない。生理的なことも現象かもしれないし、母親には乳を吸われることが快感であるように、そういう現象が母性のよろこびをかきたてるだけのこともかもしれない。もっと単純な、こわい夢でもみていてすがりついているのかもしれない。しかし、理由にこだわるより、すでにおこっている感情のたかぶりのほうが、織枝にとっては大切なものなのである。からだの充実を彼女は魔術師のようにたくみに、一瞬のうちに、働く気力へすりかえた。

へかわいいあんなのためにママは働かなきゃね〜

そっと小さい手から襟をぬき、織枝は起きあがった。六時十分まえである。

蔦の葉模様のカーテンごしの朝の光りが、明るく映えている部屋で、蚊帳から出て織枝が着替えはじめた気配で、台所の英子が、

「姉さん、まだ早いわ、六時半になったらおこすわ」

と声をかけた。織枝は英子が可愛くて好きなのだが、とりわけ声が好きである。早口なのに心のやさしさや善さがしつとりとこもっている。

「うん、でも、目がさめたから」

三年まえ離婚したとき、夫の公之が買ってくれたこの建売住宅は、三部屋の小さな二階家だが、台所だけはわりに広い。

四角な赤いデコラ張りのテーブルがある台所へ織枝が出ていくと、だしコブの匂いがこもっており、淡紅色のワンピースに白いエプロンをした英子が、ネギをきっていた。エプロンの紐が腰できちんと結んである。それが清潔な英子の気象を、いきいきと物語っていて、気持ちがいい。

織枝は英子のとなりで漬物を出しながら、やさしい、いたわるような調子で話しかけた。

「眠いでしょ」

「起きるときがたいへん。起きてしまえばいいんだけど。でも、もうなれちゃった」

「修は、小突くんでしょう」

「あら、どうして」

見ていたようにあてられて、英子がぱっとあかくなつて、まじまじと織枝をみた。あかくなつた顔をかくしたりしない英子の、そんなところも織枝は好きである。

「学生の頃から結婚する一年くらい前まで、修と一つ部屋で暮したんだもの。朝になると、姉さん六時だぞって、蹴とばすのよ」

「うわっ、わたしもいまに蹴とばされるのね！」

「どうかしらね、わたし、そんなのいやでもう一つ部屋かりたのよ、こりたらしいから蹴りはしないでしょ。姉は蹴とばしても、あなたを蹴れるもんですか、あの子に」

「あたし、蹴とばされてもいいわ」

「でも、あまやかすときりないわよ」

そこへ当の本人の修の声がした。

「姉さん、調子がよすぎるよ。部屋をもう一つ借りたのは、色気づいてさ、おれが男臭いといいたんだぜ。おれは、恋人でもよんできたんだろうと思って、我慢してやったのさ」

「うそよ、英ちゃん。ほんとはね、この子、朝ね、『おい、起きろ』って蹴とばすのよ、まるで亭主みたいで、みっともなくて」

「あははは」

と修がかぶとをぬいで、味噌汁をつくっている英子の横へ行き、鍋の中をのぞいた。

「お豆腐が浮んできたら火を消せと本に書いてあったぜ」

本番は味噌汁のほうではなく、六尺ゆたかな軀をまげて、英子の頬っぺたへちゅっとキスすることだった。

「わかってるわ、いいからはやく顔をあらってらっしゃい」

腰でぽんとおされ、パジャマの修は、

「權威をきずつけたかな」

と台所から出ていった。

いつもと似たりよったりの、織枝たちの家庭の朝である。

薄い紺のスーツをきた織枝は、修道尼のような清潔な色気がある。一見美少年のような男っぽい感じの顔立ちだが、むしろそれは離婚後、彼女自身が男の劣情や、仕事先の主婦たちの嫉妬の感情をかきたてぬために、つくりあげた化粧気のない顔である。しかしよくみると、黒目がちの強い光りをたたえた目だけにしても、感じやすく敏捷にうごき、語りかけてくる目色を読むことの出来る、女特有のあの目なのである。かたちのよい唇にしても、蛭のようなねっちょりした感じが、ぬぐいきれずのこっており、どんな濃厚な接吻にもこたえる熱いものがひそんでいる。

そうした女らしさが、とりわけセクシーなものが、精神的な動つよいものに緊縛されて、清潔な色気を放っている。

むしろ彼女は自分のそういう色気をちゃんと知っており、いっそう深くそれが奥にひそむようつとめている。ありふれた男たちの目には、なんの変哲もない地味で刺戟のない、固い女つきの少ない女に映るが、ある日、彼女の内部のはげしく凝縮され光芒を放っている女に気づいて、彼女を求める男があらわれるのを待ったためである。

一生を少年の教育にささげている小学校の女教師のような、人目につかぬ地味なつましい

感じの彼女は、旅行鞆をさげて七時半すぎ高円寺へおりた。今日からの勤め先は、駅から五分ばかりのところにある。家政婦になりたての頃は、新しい勤め先のことをあれこれ想像したもののだが、そういう想像はあたらぬばかりか、たいてい失望を大きくする。現実を正しくみる邪魔さえもする。

朝のすがすがしい気配がながれている坂道を歩いて行くと、目印の八百屋と食料品店と煙草屋のある四つ角へ出た。ポストのあるほうに右折して四軒目の左側の家である。左のほうへ大きくまわった路を五十米ばかり行くと、四軒目の家がみえだした。四五尺の高さの石垣の上に生垣があり、その中のわりと古風な庭の樹々のむこうに、まだ新しさの遺っている洒落た民芸風な二階家である。百坪あまりの敷地に四十坪くらいの贅沢な造りの家で、かなり豊かな生活らしい。その家のてまえに細い坂道があり、表通りとの角のところに、石垣をくりぬいたガレージと門があり、門の四角な石柱に、

宮川義介

という木の表札がはめこまれていた。多分本人の字だろう、個性的でなかなか格調が高い。しかしそろそろ八時だというのに、その門の扉は閉まっているし、奥の二階も階下も雨戸が閉っている。昨夜なにかあったのか、宵っばりの家にちがいない。どちらにしてもらくをさせてくれそうな家ではない。

織枝は門から少しはなれて家の造りを調べてみた。どうやら勝手はてまえの側の奥らしい。細い坂道の上の突きあたりは、別の家の門だが、そのてまえの右側の、生垣につづいた石堀の間に、裏門がみえた。近づいてみると宮川勝手口という札がかかっている。織枝は声をかけて

そこから入っていった。

つい右のところに台所があり、そのむこうどなりに裏玄関がみえた。

「ごめん下さい」

と一坪たらずのたたきに入ると、返事はなかったが、右側のほうから人の気配がした。そのたたきからじかにあがれるようになっていて、クリーム色の新建材の床の明るく広い台所の、一畳くらいの分厚いどっしりした食卓のむこう側の椅子に、白いセーラー服の女の子が腰かけ、パンとスプンを手にしたまま、ぎょっとしたように彼女をみつめていた。ひどく感じやすい、デリケートな感じの、十三四のほっそりした少女だった。少女の突然のおどろきをしずめるため、織枝はいそいで笑顔になった。

「お嬢さまですね、わたくし、聖家政婦会からまいりました。お母さまは？」

少女はなにか人ちがいをしていたらしい。束の間、ほっとした顔になって言った。

「パパがおねがいましたの？」

「いいえ、お母さまですわ」

「それじゃおあがりになって。そこのお部屋をおつかいになって。ママは、まだ寝てます、この頃、どこかわるいの、とても疲れやすいんです」

少女はなにか気をはり、無理に母親の代りをつとめようとしていた。いたいけな感じが、ほっそりした軀の線を光らすようにあふれ出ている。

「お手伝さんは？」

「いま、いないんです」

「ご自分で御飯おつくりになったのね」

ほっておけなくなつて織枝は、上り口へ旅行鞆をおき、台所へあがつていった。少女の前には牛乳とパンとハムエッグしかなかった。

「お野菜か、果物をおあがりにならなきゃね、それだけではいけませんわ」

冷蔵庫を開けると、乱雑にただおしこんだものの中に、コンビーフがあった。流しの下戸棚を開け、玉ねぎやキャベツをだし、彼女は手ばやくいためた。いためる間に湯をわかし、野菜いためにつづいて紅茶をつくつてやつた。

一口口たべて、少女は、

「おいしいわ、お上手ね」

とおどろいた声をあげ、きれいにたいらげた。そして紅茶を一口口から、織枝をまだおどろいている顔でじつと仰ぎ、

「ご馳走さまア、おいしかったわ。どうしてこんなにおいしく出来るの？」

「いためものは、よくいためたところや生のところや少しこげたところをつくるといいんですよ、それからあったかいうちにただけぱいいんですよ」

「その程度がむつかしいわね、勘ね」

すつと核心へ入ってくる少女の頭のはたらきが、織枝をちよつとおどろかせた。

「でも、勘ばかりでなくて、馴れなきや火加減だってわからないし、それに、おいしいものをたべさせたい心が大事ね」

今度は少女が織枝の家政婦らしくないところにおどろいた。